

構造家・齊藤年男

「今、走りながら考える」

朝倉幸子◎TH-1

illustration:Taco

■川口衛研究室で学ぶ

新潟県糸魚川市出身の構造家の齊藤年男さん。法政大学工学部に進んだのは、その頃は建築が花だといわれていたからだ。意匠設計がアートだとしたら、構造設計はエンジニアだからと、「最初から建築技術者になろうと決意して目指した」。祖父が大工で、大工では物足りないからと建築士になった父親がいた。カンナ屑で遊んでいたのだから木の香りは日常だった。「建築への憧れがあったわけではない、自然にだった」という。誰も当時の建築を目指す青年なら同感だったろうが、「代々木体育館がすごい」と思う。齊藤さんの視点は「あれだけの建物が形になって存在し続けていることに対して」だ。

構造設計を選んだのは、施工管理はハードでついていけそうになかったからだというが、法政大学には青木繁先生もいたのに川口研究室に入ったのは代々木への想いの強さだったのかもしれない。川口先生に直接教授された記憶はないというが、先輩の阿蘇さん（本コラム105回登場）にはつきっきりで指導してもらったと、今も感謝する。卒論は万博広場の大屋根の解析だった。1970年の大阪万博は、建築を学ぶ学生にとって影響の大きいイベントだったと再確認である。

■ビルダーのなかで構造の立場

川口衛先生から、ある企業からの就職枠があると打診されたときには、細田工務店の内定をもらっていたのでそのまま入社した。団地の大規模宅地開発などを中心に木造住宅の建売販売をする会社で、齊藤さんは設計部に配属された。時に世は住宅全盛期で牛久の団地の設計など、一年で100棟を超える設計をしていたといえます。

構造を学んだものの、ビルダーの設計は意匠が主になる。構造設計に関わる仕事が必要となったのは、始めて4年目くらいで、世の中は住宅需要が全盛。量産

してきた木造住宅の材料の優劣が目に見えて出るようになってきた。クレーム産業などといわれていた頃の話だ。そのため、建主や職方に構造的な説明をする必要に迫られた。瓦屋根だからこの寸法の垂木が必要になるとか、庇の長さの限界はこの寸法になるなど標準値が必要となった。そのスパン表を齊藤さんが作り、社内で初めての構造指針にしたという。その後の齊藤さんの活躍は愉快なくらいで、マーケティング広報部やリフォーム部部长など多岐にわたる。リクルーターとしても4年で100人くらいを採用して、現在中枢をなす技術者に育てたのである。

■木質構造技術者としてのイメージ定着

社内体制は変わったが、日常に激変はなく最適化の道を行き始めた毎日だ。今までの「よく考えてから動く」では駄目なのだ。「考えながら動く」のがグループの指導。これまでも新しい課題を与られ取り組んで成功させてきた齊藤さんには、もってこいの環境だ。齊藤さんが講師の「細田工務店のすまいの基礎講座」は一般ユーザーにもわかりやすく人気がある。

1995年阪神・淡路大震災の後、建材試験センターからの誘いを受けた実大振動実験の縁で武蔵工業大学（現東京都市大学）の大橋好光教授との知遇を得た。その後、大橋先生と共著で「木造住宅設計者のための構造再入門」（2007年、日経BP）や、「ひとりで学べる木造の壁量設計演習帳—基準法・性能表示の仕様規定による設計」（2012年、日本建築センター）を出版した。「講習会をご一緒する機会もあり」木質構造技術者のイメージが定着していった。

優しい文章や言葉から、奥に潜む木造に対してのなみなみならぬ思いが滲む。初めて覇志堂が原稿を依頼してから20年。新しい土俵でもさまざまな取り口をみせてくれそうな構造家なのだ。

